



Title	“典型” 分析の視点と方法：比較教育の観点から
Author(s)	広川, 和市
Citation	北海道大學教育學部紀要, 10, 97-99
Issue Date	1964-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29010
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_P97-99.pdf



典型、分析の視点と方法

——比較教育の観点から——

広 川 和 市

〔一〕 日中朝三国比較教育の観点と研究方法論

鈴木朝英教授は、『比較教育』（1958年）において、「アジアをエリアとする比較教育研究の場を求めよう。」と提示された。この提言の背景は、一言で要約するならば、「平和五原則」「バンドン会議」に象徴されるような新興アジア・アフリカ諸国の世界政治の舞台への登場であったといえるであろう。

その後、数年、世界の激動はいよいよ激しく、いまや、「全般的危機の第三段階」を迎えている。この大波は、アジアをとり残すことをしなかった。否、アジアこそ、この大波の直撃点であった。その変貌は正反二面の変化を伴った。その変化（というより矛盾のいっそうの顕在化）が集中的に表現されているのは、日本と中国・朝鮮が、アメリカを媒介として、特殊な関係を結んでいることであろう。

われわれの研究をとりまき、その質を規定し、研究がその対象とするところの「客観的現実」の変化を研究の面で自覚的にとらえた見事な一例を、われわれは、昨年（1963年）9月、公表された日中朝三国科学者代表による「日中朝三国学術文化交流促進に関する共同声明」に見出すのである。われわれが中朝両国を研究対象としてとりあげることは、どのような意味をもつか。教育学研究の領域においては、問題はどうかあらわれるか。すなわち、日中朝三国比較教育（同様の観点から比較教育における東南アジア研究）の立場に立ち、研究方法論をきたえることが、課せられていると把握するものである。

したがって、国民教育の課題にふれつつ、五十嵐顕氏がかつて提出された問題はあらためて問題とされなければならない。氏は書いている。「われわれは日本の帝国主義政策によって強圧された朝鮮・中国の人民が人民民主主義と社会主義社会の建設のための闘争によって民族自立の仕事としての国民教育の障害を克服した事実を十

分に念頭にいれていなければなるまい。」（「国民教育と教師」）この指摘は、たんに「自国の教育問題」をよりよく解決するという「正しい意味での実用的意識」ととどまるものではなくて、教育学のあり方、教育への迫り方、研究の方法論にふれるものと、われわれは理解する必要がある。社会主義社会の教育学を研究する意味にふれた別の労作（「A. B. ルナチャルスキー教育思想についての覚書」）の中で、五十嵐顕氏は、述べている。

「教育学においてある対象を研究対象として設定し、研究することは教育学主体の対象化を意味する」ものであり、結局は「われわれにとって教育学研究の方法論に関する問題である」として、つぎのように、先の指摘を研究方法の問題として展開されている。「ある特定の教育事象を研究しようとするとき、社会的階級的な規定は研究対象ばかりではなくて、対象に働きかける研究活動にもおよんでいる。教育学における活動の主体も対象も歴史的な、社会的な性質をまぬがれないのであってこの規定からの自由自主は研究活動と対象を規定する歴史的社会的性質に対する批判、つまり教育学批判という理論的・実践的闘争によってであろう。」さらに五十嵐氏は、この論点を教育科学成立の根拠にまでおしつめている。他の労作において、「教育現実に対する関心」と「教育に対する科学的認識」とをならべて並列的に強調することではなく、教育現実に対する実践的関心や教育現実の変革的实践が「教育現実の科学的認識の成立」にとって「不可欠なほどの前提」であるとのべられている。（「教育科学における実践の問題」）ここでいわれる「教育現実」をわれわれは現在、中国と朝鮮とに対して、日本を敵対的な形でしか結びつけていない体制とそれを解き放ち、両国と協力的に結びつこうとする力との矛盾＝闘いとして自覚化しないわけにはいかない。ここから、日中朝三国比較教育の観点がうまれてくるのである。

しかしながら、この観点を教育学の全領域において展開することなどないといえないので、一つの問題領域にしぼ

って、今後検討していくこととなろう。小稿では、そのあらすじをえがくにとどめざるをえなかった。

〔二〕 「典型」分析の視点と方法

—比較教育研究と指導方法論—

上述の観点によって考察する一つの問題領域とは、指導方法論である。

「教育をめぐる、教育に浸透している階級的な性質は、同様に教育に対する学問活動にも浸透しうる」という状況にあって、研究活動を続けるわれわれが、研究の科学性をかくとくするための保障は何にもとめるべきであろうか。問題は二点にわたると考える。

一つは、研究の対象に対する着意の仕方である。その二つは、階級的制約からくる歪み（われわれに内在する克服すべき思想）の研究活動における表現、研究上の誤りをどう正していくかという問題、すなわち、「研究の自己批判」の問題である。この二つの問題をわれわれのテーマについて、検討したい。それは、研究方法論を提示することによって果されるであろう。

われわれは、毛沢東と故正木正京都大学教授の指導論に、ことさらにひきつけられた。相異なるこの二つの指導論を同時にわれわれが問題にするのは何故なのであろうか。一つは、両者がそれなりに指導の本質をついていであろうが故にであろうし（客観条件）、二つには、われわれ自身に存在する矛盾の故にであろう（主観条件）。

したがってこの二つの指導論を比較することは、五十嵐顯氏のいえば、中国や朝鮮の指導論の中核概念をとりあげることによって「資本主義社会の教育学諸概念」の「永遠性」を批判し、矛盾を暴露することであり、さらにわが国の指導論の概念の内容を豊かにするという側面をも併せ持つであろう。

われわれの作業のあらすじは

①日本の指導方法論の代表的見解をあらわすものとして、正木教授の所論をあげ、

②正木教授の指導論の核心は、「感化」論にあるとおさえ、（教育作用における矛盾の統一の機能をあらわす概念を「感化」、矛盾の闘争をあらわす、教師、指導の側の働きを「自己否定」としておさえ、

③正木的、観念論的、いわゆる「日本的」「感化」および「自己否定」に対して、毛沢東的、唯物論的、中国的、朝鮮的な「感化」および「自己批判」とを対置させ、

④二つの立場（二つの概念内容）のちがいを明確にし、正木の感化概念の矛盾をつく突破口たりうる概念として「典型（の教育的意義）」を把握する、という諸段

階を踏むであろう。

今回は、何故、「典型」の分析から始めなければならないのか、その方法はどのようなものかを明らかにし、研究の出発点を確認するにとどめた。

（なお、ここで「典型」とは、毛沢東が、1945年の論文「必須学会做経済工作」の中でのべているような「典型示範」—典型によって模範を示す—『毛沢東選集』人民出版社・北京、第三巻、P. 1016所収、の意に用いている。）

〔結び〕 今後の課題および作業

修士論文で明らかにした研究の道すじをたどることが今後の課題である。

当面は、この問題をいっそう明確にするために、今まで感覚的にとらえていた正木および毛沢東両者の指導論の位置づけを明らかにすることが、作業として提起される。「日本型指導方法論」における正木教授の位置を明らかにすること。（たとえば近藤寿治や高坂正顕教授の所説との比較。）および「指導方法論の日本化」の問題につながるのだが、唯物論的指導方法論の原則が各国でどう具体化されているかを把握するために、中国的・毛沢東的指導方法論に学び、自国の条件に適用させているものをとりあげること。（たとえば東南アジア、とりわけインドネシア）この二つの作業を通じて、「日本型指導方法論」と「指導方法論の日本化」のちがいをおさえ、それをとくための正木・毛沢東比較の意義を確認したい。

その後、本論として、先にふれた、①—④の四つの手順に従い、さしあたり、中国的指導方法をより深くとらえるため、次の三つの作業を行う。

指導方法論は、「唯物弁証法の実際活動への高度の適用」であり、中国における指導方法の大原則、「指導方法に関する党中央委員会の決定」（毛沢東の起草になり、選集には、「指導方法に関する若干の問題」としておさめられている。）は、「矛盾論」「実践論」の指導論への適用であるから、哲学と工作の両面から（理論と実践の両面から）問題に接近しなければならない。

(i)大衆運動（とりわけ、生産闘争、たとえば代表的なものとして、1953年に始まる農業協同化運動、1958年に始まり、現在、全国的に展開されている社会主義労働競争、「比学赶帮運動」）における事例の分析。

(ii)中国における弁証法的唯物論＝毛沢東哲学との関連で指導方法論を把握すること。そのさい、とくに顕著である「部分質変論」（量的発展過程における部分的な質的变化）をよりどころとして、典型である「新しい質」

㊦典型、分析の視点と方法

が全局に拡大し、事物の性質が変化していく構造を、個人の思想の変革過程を中心にして検討したい。これは、毛沢東の独創的な軍事思想、「戦略的には敵を軽視し、戦術的には敵を重視する」思想の教育への適用を意味するであろう。

㊦に関連して、個人の活動における主観主義の根源とそのあらわれの検討。これは、正木教授のいう教育作用の成立を妨げる「エゴイズム」の観点との関連を有する。主として、典型の認識論的意義、典型の実験的機能という側面からの分析という形をとるであろう。